

「読み解く力」の育成

「読み解く力」説明会資料
教育委員会事務局指導室

1 社会の動向とこれからの教育

これからの社会動向

子どもたちが社会で活躍する 2030 年頃に「超スマート社会 (Society5.0)」の到来が予想されている。これまで以上の加速で進んでいく社会変化の中で、これからの時代を生き抜くために必要な力を子どもたちに育むことが重要となる。

どのような時代の変化を迎えても、共通して求められる力

- ①文章や情報を正確に読み解き、対話する力
- ②科学的に思考・吟味し活用する力
- ③価値を見付け生み出す感性と力、好奇心・探究力

重要とされる読み解き対話する力

- ・文章や情報を正確に理解し、論理的思考を行うための読解力
- ・他者と協働して思考・判断・表現を深める対話力等の社会的スキル

2 現状と課題

○フィードバック学習方式及び板橋区授業スタンダードに基づく授業革新により、全国平均値をほぼ超えた。

- 文の成分の順序や主語と述語の照応等を考えて読み取り、適切な文を書く力に関するところに課題がある。
- 文章の内容を踏まえ複数の条件に合わせて70～120字程度で書いて説明することに課題がある。

3 目的 全ての教科等に関わる基礎的・汎用的な能力である「読み解く力」を育成し、一層の学力向上を図っていく

「読み解く力」とは 文章や図表等から必要な情報を正確に取り出し、比較・関連付けて読み取り、その意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決したり、表現したりする力

「読み解く力」を支える基礎的読解力の分類について

	係り受け解析	照応解決	同義文判定	推 論	イメージ同定	具体例同定
捉え	文の構造を正しく把握し、「誰が」「何を」「どうした」が分かる。	「それ」「これ」などの指示詞が指し示すものや省略されている主語・目的語が分かる。	2つの文を比較し、それらが同義か否かを正しく認識する。	既存の知識と新しく得られた知識から、論理的に判断する。	提示された文が、どのようなことを表しているかイメージする。	辞書の定義を用いて新しい語彙とその用法を獲得する。理数的な定義を理解し、その用法を獲得する。
問題例	天の川銀河の中心には、太陽の400万倍程度の質量をもつブラックホールがあると推定されている。 天の川の中心にあると推定されているのは()である。 → ブラックホール	火星には、生命が存在する可能性がある。かつて大量の水があった証拠が見つかっており、現在も地下には水がある可能性がある。 かつて大量の水があった証拠が見つかったのは()である。 → 火星	霧経は平氏を追いつめ、ついに崖ノ浦でほろぼした。 平氏は霧経に追いつめられ、ついに崖ノ浦でほろぼされた。 → 同じである	エベレストは世界で最も高い山である。 エルブレス山の高さはエベレスト以下である。 → 正しい	次の文の内容を表す図として適当なものを全て選びなさい。 四角形の中に黒で塗りつぶされた円がある。 ①  ②  ③  ④  ① ② ③ ④	2で割り切れる数を偶数という。そうでない数を奇数という。 偶数を全て選びなさい ① 65 ② 8 ③ 0 ④ 110 → ② ③ ④
授業実践例	□主語と述語、修飾語と被修飾語を線でつなぐ、色分けをさせる。	□指示代名詞と意味する語句を色分けする。 □省略された主語や目的語を補完して記述させる。	□自分の考えと他者の考えを交流させ、同義か異義かを判断させる。 □解答例を基に記述した文章の答え合わせをさせる。	□既習の知識と本時の学習で得られた知識を組み合わせ、課題に取り組ませる。 □課題解決のために複数の資料から、根拠を見付けて方策を考えさせる。	□文に書いてある内容を図や表等で表させる。 □図や表等、非言語情報を文で説明させる。	□定義に則して具体例を説明させる。 □具体例が定義に則しているか確認させる。 □新しい語彙を着実に獲得させる。
学習の取組	読んだり書いたりする学習活動を、毎時間取り入れる。					

4 具体的な取組

1 「基礎的な読む力」を測るテストを活用した実態把握

「読み解く力」を支え、文章の仕組みや意味を正しく理解するために必要な基礎的読解力を6つの視点で測るテストを実施し、客観的に実態把握を行う。

【対象】区立小学校第6学年

区立中学校全学年

【実施期間】1学期

2 読みのつまずきに関するアセスメントの実施

文字や語を正しく読む際に、特につまずきの多い特殊音節を中心としたアセスメントを行い、その結果に応じた指導用教材を使用し、児童・生徒の読みの力の段階に応じた指導・支援を行う。

【対象】小学校第1・2学年が重点

【期間】通年

3 授業革新・教材開発

実態把握に基づき、読み解く力を支える基礎的読解力の視点を取り入れた授業革新を推進していく。

- ①全教員、基礎的読解力についての理解
- ②教科書や文章、問題文を正しく読ませるための活動の位置付け（授業スタンダード）
- ③ノート見開き1ページを基準とした学習記録の計画及び、振り返りの充実・徹底
- ④研究授業等での指導の重点と基礎的読解力を関連付けた授業実践
- ⑤教科外のトピック的教材の開発
- ⑥読書活動
- ⑦家庭学習

【研究実践】各学校、研究校、学びのエリア、教育会、区中研

【研究・実践対象】全学年全教科等

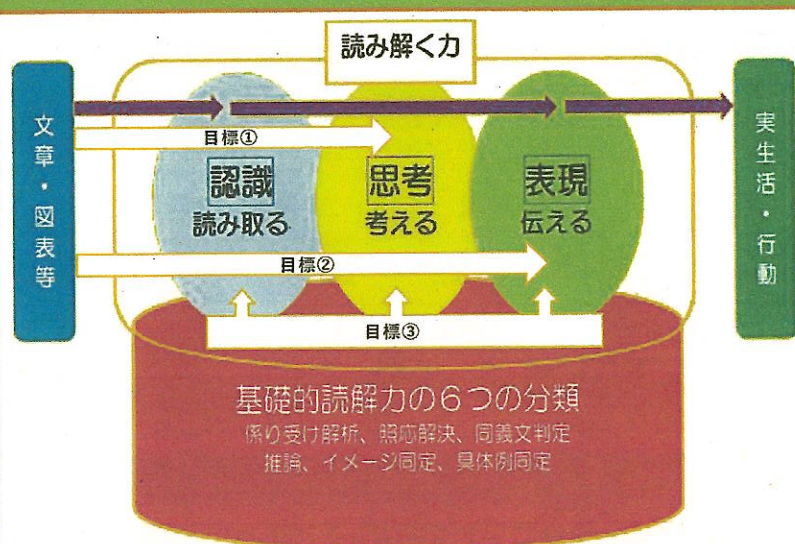
4 小中学校9年間を通した指導計画の開発

研究・実践を基に、小中学校9年間を通した各教科等の指導計画を開発する。

【内容・時期】

カリキュラム開発【H31～】、
啓発リーフレット作成【H32】
9年間の指導計画の冊子作成【H33】

「読み解く力」を育成する学習機会
(参考：文部科学省 読解力向上プロジェクト)



【目標①】テキストを理解・評価しながら読む力を高める機会

- 読む目的を明確にすること
- テキストを肯定的に捉えて理解すること(情報の取り出し)
- テキストの内容や筆者の意図などを解釈すること
- テキストを自分の経験や知識と関連づけて様々な視点から理解、評価すること
(視点の例：内容、形式や表現、信頼性や客観性、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさ)

【目標②】テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める機会

- テキストを利用して自分の考えを書くこと
(例：内容を要約、紹介する、再構成する、自分の知識や経験と関連付けたり意味付けたりする、自分の意見を書く)
- 授業のまとめで自分の考えを80字から200字程度で簡潔に書くこと
- テキストを読んで理解することによって得られた知識等について、実生活や行動と関連付けて書くこと
- 自分の書いたものを推敲することを通じて読む力を育てること

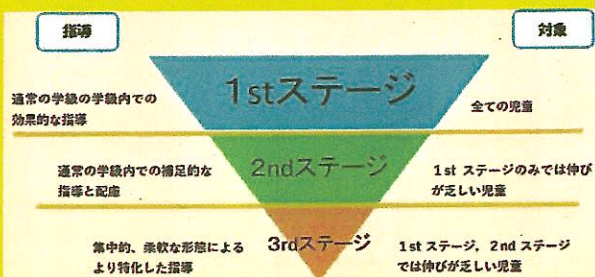
【目標③】様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会

- 読書活動を推進すること
- 新聞や科学雑誌など実用文を含め、様々なジャンルの読み物に親しませること
- 授業の中で、自分の意見を述べたり、書いたりすること
(目的や条件を明確にして自分なりの考えを述べる、論理的・説明的な文書文章に対する自分の意見を書く、人の話を聴いて、それに対する自分の考えや問いを述べたり書いたりする等)

読みの力を身に付ける指導 (MIM多層指導モデルの活用)

MIMとは

MIM(Multilayer Instruction Model)とは、全体から個へ、全ての子どもたちに効果的な指導を隔々まで届けようとする通常学級における学習指導モデル



通常の学級の多様なニーズのある子どもたちに、特殊音節を中心とした語の正確で素早い読みや流暢性のある読みの実現を支えるために、本区では、小学校第1・2学年児童についてMIMを活用した読みの力を身に付ける指導を行っている。MIMの指導法は次の3つのステージがある。

1stステージでは、子どもたちにつまずきが多くみられる「しっぽ」等の小さい「っ」(促音)、「おうさま」といった伸ばす音(長音)、「キャベツ」等の小さい(ヤユヨ)(拗音)等に見られる「特殊音節」を含む言葉も、速く正確に読めるようにするために、視覚化や動作化(特殊音節に応じて手を動かす等)を用いて指導する。(全体指導)

2ndステージでは、通常の学級の一斉指導に加えて、毎月行われるチェックテストで十分に理解できていないと考えられる子どもたちに対して補足的な指導を行う。(少人数指導)

3rdステージでは、2ndステージの指導を行っても十分な伸びが見られない子どもたちに対して授業中や授業外の時間に補足的、集中的に個に焦点をあてた指導を行う。(個別指導)

【重点校等の取組例】

- ・小学校では、低学年だけでなく、全学年で毎月MIMを実施し、子どもたちの読みについての実態を把握し指導に生かしている。
- ・朝の時間や帰りの時間等に、簡単な語彙に関する学習や、国語等の授業において、拗音、拗長音カードを作り、言葉づくりゲームを行っている。
- ・特別支援学級でも活用し、児童・生徒の読みの力を伸ばしている。
- ・中学校では、MIMを活用し補足的な指導を行うとともに、教員がMIMを体験する研修を行い、普段の教科指導に生かしている。